

<<東北魂>>を鼓舞する
電子新聞

発行所 株式会社遊無有
〒207-0015
東京都東大和市中中央 1-539-15
http://www.yumuyu.com/
e-mail:y.s.yumuyu@ozzio.jp

東北再興

Re-CreatE , TOHOKU!

無料

第115号

毎月発行

発行 2021年(令和3年)12月16日 木曜日

2021年(令和3年)12月16日 木曜日

【当新聞発行責任者 兼編集長兼記者紹介】

【砂越 豊】

宮城県生まれ、68歳の新人
歴史映像作家兼プロデュー
サー。3作目の「古代製鉄の
埋もれた歴史を掘り出した映
像」の【奪われた古代鉄王国】
の「大崎上野」の映像を、
この新しい映像制作の
文化を掘り出すこと
を目標とする。



「大谷翔平」でこの一年を締めよう そして来年は「大谷翔平」のチャレンジ精 神を見習って生きよう！

今年1年を振り返る

今年12月16日の発行であり、ちょうど良い時期なので、この一年を振り返ってみようと思う。

今年、実にさまざまなことがあった。
しかし、暗い話題・出来事が多かった。明るい話・出来事は非常に少なかった。
まずは、今年全体を通してまとめるとそうなることに異論はないだろう。

残念ながら世界中に浸透してしまったコロナ禍は相変わらず継続中である。いまだに終息宣言が出せない状況が続いている。
そのため、世界中で人の行き来が遮断された。
それに連動して経済も遮断され、その影響で世界中に「貧困」が猛烈なスピードで増えた。世界も日本も東北も同様だった。
新型コロナウイルスは現実の病気であるが、そのウ

イルスが引き起こした結果が「貧困という重病」であり、それが影響を与える人間の数、その深刻度は想像もできないレベルであると推測する。

そんな現在進行中のコロナ禍もいつかは終息する。来年は、このコロナ禍の総括をあちこちでして欲しいと思う。

コロナ禍という世界を巻き込んだ「騒動」がいつた世界をどのように、どの程度破壊したのか、徹底的に追及して欲しいと願う。

一方、このコロナ禍を世界から吹き飛ばすことを願って、一年延期してようやく開催された「東京オリンピック」だったが、期待ほどには盛り上がりなかった。
戦争や紛争が起きたわけでもない状況下のオリンピックで、「開催すべきだ」、「や「さらに延期すべきだ」、さらには「中止すべきだ」と意見が割れたオリンピックとして歴史にきつと残ることだろう。

また、来年は日本や東京が背負った「巨額の負債処理」について激論が戦わされるであろう。注視しなければならぬ。
*
それから日本の政治リ



まるであどけない子供のようだ！



勝利の雄たけび

ダーシップを今年ほど問われた年もなかったであろう。
コロナ禍へのちぐはぐな対応が、国民のほかない期待をいったい何度裏切ったことだろう。
なぜこんな簡単なことが出来ないのだろうと大多数の国民は痛切に感じた。
もう政治不信などというレベルをはるかに超えた「混沌」の渦中に国民が何度も突き落とされた。
振り返りたくもない一連の流れであった。
そのなかで分断され、破壊され、ひどく傷ついたのは「国民の良識」であったと断言しよう。
来年は、そのツケが回つ

てくる。元に戻れるだろうか。非常に心配である。

明るい話題は「大谷翔平」

こうした暗い一年であったが、明るい話題を提供したのは何といても「大谷翔平」である。
今年「大谷翔平」の一年と云っても良いくらいである。それは揺るぎのない事実である。
日本でも、アメリカでも、もちろん東北でも、岩手の奥州市ではなおさらである。日本やアメリカでは、「大谷翔平」の一試合、一試合に熱中したファンが多かつ

ただろう。
いや、投げる一球、一球、打つ一球、一球に興奮し、また、がっかりしながら試合に熱中したことであろう。
こうした多くの試合の一年の積み重ねが、偉大な記録を産んだが、言葉で表せないほど、すごいことをやってのけたのである。
そんなことで、暗い一年だった日本の今を一時でも離れ、かつ、暗い話題で一年を振り返るのは止めにして、「明るい大谷翔平」一本に焦点を絞った振り返り記事にしようと思う。
暗いのと不幸は持ち越さない方が良くと思うからである。

試合を楽しむ姿は表現のしようもない魅力
大記録を打ち立てた「大谷翔平」であるが、印象に残る姿は、必死に頑張る姿でもなく、苦しそうに試合をする姿ではなく、子供のよきな笑顔であり、勝利したときに見せる素直に喜びを表出するガッツポーズであった。
プロの選手である以上、必死の努力することなく一流であり続けることなど無理なことは百も承知であるが、そんな姿は見せない。それにしても、あの笑顔はものすごい魅力である。試合に出てプレーするのが



屈託のない笑顔は“日本人のお守り”？

「楽しくて、楽しくて仕方ない」という表情である。これだけ野球を楽しめる一流選手はなかなかいないのではないだろうか。それだけではない。プレーの後の表情もなんとという魅力振りまいているのだろう。

初ホームランはメジャーでは「サイレントトリートメント」といって、わざと無視する儀式があるようだが、あの時の「大谷翔平」は可愛すぎた。

シーンとしたベンチに帰って呆然とした後のしぐさは忘れられない。

「誉めて！祝って！」と

ねだりながら、背を向けた選手たちの背中にそっと触れるシーンは試合以上に印象的であった。

それ以外にも、自分が打ったファウルチップが審判にあたり、苦しむ様子に申し訳なきようにしていた姿はアメリカのファンをくぎ付けにしたそうだ。

こんな選手は大リーグにはいない。日本にもいない。試合でも試合外でもたくさん魅力振りまいたのが「大谷翔平」だったのだ。

世界中で大谷翔平を知らないものはいない

あれだけの活躍であるか

ら世界中で報道された。したがって、「大谷翔平」ファンは世界中に増殖したはずである。

だから、日本やアメリカだけの現象ではないのだ。さらに言えば、今や、世界中で大谷翔平を知らないものはいないほどである。それだけの活躍をした年であった。

一人の野球選手がたった一年で世界中に知られる存在になるというのは考えてみればすごいことだ。そして、その意味をあらためて考えるのは意義あること

野球の賞は素直に受賞国民栄誉賞は辞退

それから筆者は、アメリカでは数々の野球に関する賞は喜んで受賞していたが日本政府が進呈しようとした国民栄誉賞を辞退したのはさすがだと感じ入った。

表面上は、まだ選手生命は続くからという理由で断っているように見えるが、そこに、「名誉受賞」にはまだ収まりたくないという自負は読み取れないだろうか。

そうであって欲しい。

国内でも見かけなくなったチャレンジ精神

それにしてもと思うのである。

最近、国内では見かけなくなったチャレンジ精神を筆者は彼に読み取ったと感じるのである。

近年の日本には、どの国にもない技術発明、製品発明が見られなくなった。かつては進取の精神に富むと位置づけられていた最近の若者も起業もしないし、真摯に発明にいそむなどという姿勢を泥臭いと敬遠する空気が満ちていると感じる。

その点「大谷翔平」はどうだろう。

愚直に野球と親しみ、アメリカのメジャーで「少年野球の夢」を思い求めるなど、チャレンジ精神の極みと言えないだろうか。

遠く離れたアメリカから、「大谷翔平」は日本に、東北に、岩手にエールを送っているように思えてならない。

彼から感じるのは、素朴で、ストレートな、チャレンジ精神。ひねくれたところのない、嫌味のない、屁理屈をこねくり回さない素直なチャレンジ精神である。これは、いま日本にもっとも欠落しているものではないか。

それを野球を通して、日本に、世界に見せたいと言えないだろうか。

東北・岩手・奥州市出身とは無関係か？

こうしたチャレンジ精神は、岩手の奥州市に育まれたものだと言ったらおかし

今年は大谷翔平が世界の常識を打ち破った年

周知のように、野球界にもたらした衝撃もすごかった。まるで少年草野球のような、ピッチャー兼打撃の中心の「二刀流」である。そのそれぞれの分野での大記録を打ち立てた。外野も守る。

これは、アメリカで作られた「二刀流」ではなく、岩手で少年野球をしていたなかかもしれないとも思う。それを野球の中心であるアメリカで実現しただけのことかもしれない。

そう考えるとすんなり納得できる気がする。

いだろうか。

筆者は、こうしたチャレンジ精神の中心に、東北ならではの、岩手奥州市ならではの反骨精神も深く影響しているように感じられてならない。

岩手県はたくさんの方の政治家を生み出した。そうした系譜が「大谷翔平」にも脈々と受け継がれていると思うのである。

そして、さらに遡れば、そこにはアトレイ・モレの伝統があるのではないか。

今年も来年も大谷翔平を旗印に生きていこう

たびたび受けてきたインタビューのなかで、「大谷翔平」は今年成績で満足するつもりはないと述べている。まだまだチャレンジは続くのである。非常に楽しみである。

打撃ではたくさんの方の敬遠を経験した。

投げる方では、味方打線の貧打でなかなか勝利投手になれなかった。

状況次第だが来シーズンはより活躍しそうだ。

ならば、今年の締めくくりとしての「大谷翔平」だけでなく、来年も「大谷翔平」を掲げて、彼に見習い、素朴に、ストレートに東北の再興に向かって進もうではないか。



初ホームランでメジャーの“洗礼”



“洗礼”のあとの祝福



皆で囲む鍋もいいですが、気軽に一人鍋もいいですね。

第88回

水産業再興のための 料理レシピ紹介

《タラと白菜の 豆乳個なべ》

材料: タラ 1 切れ、塩 1 グラム、白菜大 1 枚 (150g)、にんじん 30g、無調整豆乳 200C C、出し 100 C C、しょうゆ小 1、うどん 1 玉、ねぎ 2 本

料理方法: ① タラは一口大に切って塩を振り、水けをふく。白菜は一口大のそぎ切りにし、にんじんはピーラーで薄切りにする。② なべに豆乳、出し、しょうゆを入れて中火で温めます。ふつふつしてきたら、タラと野菜を入れて中火で煮ながら熱いところを頂きます。最後にうどんを入れます。



郷土料理愛好家
松本由美子氏

コロナ禍も終息して、2年近く延期中の「三陸酒海鮮会」はいよいよ再開近いかと喜んでいたところ、今度は「オミクロン」なる変異型が出現。これでまた延期でしょうか？早くみなさんに会いたいです！そして美味しい東北地酒をみんなと酌み交わしたいです！



訃報

三陸酒海鮮会の常連だった「郷古直仁さん」が10月30日突然ご逝去されました。いつもニコニコしながら静かに、東北地酒を味わいつつ飲んでおられた姿を思い出します。心からご冥福をお祈りいたします。

東北の出生率を

上げるには

都道府県で大きく異なる合計特殊出生率

以前ここで書いたことがあるのが、全国的な出生率の低さのことである。通常人口減少の問題に関連して取り上げられるのは、合計特殊出生率のことで、一人の女性がその年齢別出生率で一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当する。現状の人口を維持するためには二・〇七が必要であるが、日本の合計特殊出生率は二〇二一年で一・三七である。過去最低だった二〇一七年の一・二六よりは上向いているものの、依然として低空飛行が続いている。

日本全体では一・三七であるが、これを地域別に見ていくとかなり差がある。大まかな傾向として、西高東低である。全国で最も低いのは東京都で一・一二であるが、次いで低いのは北海道の一・二九、東北も軒並み低く、宮城の一・二五を筆頭に、青森一・二六、秋田一・二九、岩手一・三七、山形一・三九で、福島だけ少し高く一・四九である。これに対して西日本は、全国最高の沖縄の一・七九を始め、宮崎一・六一、熊本一・五八、鹿児島一・五六、長崎一・五〇などの数字が並ぶ。

大都市圏を擁する都道府県は全体として低く、東京以外でも京都一・二〇、神奈川一・二八、大阪一・二八だが、愛知はそれらよりよく一・四三である。宮城は仙台という大都市圏を抱える県ではあるが、その都市規模は横浜や大阪には遠く及ばない。にもかかわらず、宮城の合計特殊出生率は神奈川や大阪よりも低いのである。これがなぜなのか、その要因を正直掴みかねていた。

子育て環境の違と少子化の関係
このところネットに掲載された少子化に関するいくつかの論考を目にする機会があった。とりわけ、「WEDGE INFINIT」の特集「都市vs地方」の中に載った吉田浩氏の論考「中核地域の宮城と広島出生率がこれだけ違うのは？」が興味深かった。氏は「地域力」を測る指標として高齢化率や生産年齢人口は十分とは言えないと指摘し、高齢者の就業について説いたその前の論考に続いて、この論考では女性の就業に焦点を当てている。

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
岡本裕明氏は自身のブログ「外から見る日本、見られる日本人」の中で「お一人様ライフの功罪」について書いた。自身が海外で体験した環境と日本のそれを比較して、少子化問題がなぜ改善できないのかという疑問に対して「お一人様ライフが楽しいからだ」と指摘している。「日本を含むアジアはナイトライフがあまりにも充実している」のだという。日本では飲んだくれないが、北米ではまず歩いて帰れず、交通機関にも限界があり、ナイトライフはせいぜい週末だけのことだったという。

か。都市圏であれば確かに深夜でも公共交通機関が動いており、帰るのに困らないかもしれないが、東北の地方都市ではそうはいかない。首都圏の合計特殊出生率が低い理由の一端にはなるかもしれないが、これは東北の低さの説明にはならなさそうなのが気になる。

責めを負う道理などないわけである。どんな事情にせよ、生まれてきた子どもがその出自に関わらず、肩身の狭い思いをしたりすることなく、しっかりと育つように必要な制度を整えることが巡り巡っては少子化の解消に貢献すると私も考える。

論プラットフォーム『アゴラ』に寄せた「少子化問題を考える①」出生率低下は経済成長にともなう不可避な人口動態の中で、「経済発展によって妊産婦や乳児の衛生環境、栄養状態が向上して、周産期や乳幼児の死亡率が低下すると、子どもを多く産む必要がなくなる一方、豊かさは女性の教育水準を引き上げ、社会進出を促して女性の晩婚化と出産抑制を引き起こす。しかも、学歴が生涯収入を左右するため、親の教育熱が高まり、家計の教育負担は増す。親は子どもの数を減らして負担を減らそうとする」と指摘し、「女性が子どもを産まなくなるのは、経済成長と生活の都市化に伴って生じる、言わば社会発展の帰結の一つだ」と結論づけている。ただ、これも先の岡本氏の論考と同じで、東北の生活が西日本より都市化しているとは考えられず、国全体としてそのような傾向はあるとしても、地域差が生じることの説明にはなっていないように思う。なお、衛藤氏は次稿で「出生率を上げるための方策を考えてみたい」としているが、どのような方策が提案されるか注目したい。

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
「北欧などの事例や近年の女性の高学歴化、そして結婚に期待する意識の変化を踏まえ、出生率の回復と女性就業を同時に達成する社会や地域を構築することが地域の持続可能性に大きく影響する」とし、それに加えて、女性のワークライフバランスと活躍だけでなく、「当然に、男性も育児や介護に参画しながら、生産活動に従事していくことが求められる」としている。

の子ども「子育て」というとても素晴らしい文言があるのだが、中身を見ると①(仮称)次世代育成・応援基金の設立、②不妊治療に対する支援の拡充、③県立高校の入学生全国募集モデルの検討・実施、④全日制・定時制・通信制を融合させた新しいタイプの高校の開設計、とあって、どう見ても「これじゃない」感が否めない。①はともかく、②は既に国で取り組んでいることであり、③④はただ子どももつながらでここに置いただけじゃないかという気までする。

大都市圏を擁する都道府県は全体として低く、東京以外でも京都一・二〇、神奈川一・二八、大阪一・二八だが、愛知はそれらよりよく一・四三である。宮城は仙台という大都市圏を抱える県ではあるが、その都市規模は横浜や大阪には遠く及ばない。にもかかわらず、宮城の合計特殊出生率は神奈川や大阪よりも低いのである。これがなぜなのか、その要因を正直掴みかねていた。

子育て環境の違と少子化の関係
このところネットに掲載された少子化に関するいくつかの論考を目にする機会があった。とりわけ、「WEDGE INFINIT」の特集「都市vs地方」の中に載った吉田浩氏の論考「中核地域の宮城と広島出生率がこれだけ違うのは？」が興味深かった。氏は「地域力」を測る指標として高齢化率や生産年齢人口は十分とは言えないと指摘し、高齢者の就業について説いたその前の論考に続いて、この論考では女性の就業に焦点を当てている。

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
岡本裕明氏は自身のブログ「外から見る日本、見られる日本人」の中で「お一人様ライフの功罪」について書いた。自身が海外で体験した環境と日本のそれを比較して、少子化問題がなぜ改善できないのかという疑問に対して「お一人様ライフが楽しいからだ」と指摘している。「日本を含むアジアはナイトライフがあまりにも充実している」のだという。日本では飲んだくれないが、北米ではまず歩いて帰れず、交通機関にも限界があり、ナイトライフはせいぜい週末だけのことだったという。

か。都市圏であれば確かに深夜でも公共交通機関が動いており、帰るのに困らないかもしれないが、東北の地方都市ではそうはいかない。首都圏の合計特殊出生率が低い理由の一端にはなるかもしれないが、これは東北の低さの説明にはならなさそうなのが気になる。

責めを負う道理などないわけである。どんな事情にせよ、生まれてきた子どもがその出自に関わらず、肩身の狭い思いをしたりすることなく、しっかりと育つように必要な制度を整えることが巡り巡っては少子化の解消に貢献すると私も考える。

論プラットフォーム『アゴラ』に寄せた「少子化問題を考える①」出生率低下は経済成長にともなう不可避な人口動態の中で、「経済発展によって妊産婦や乳児の衛生環境、栄養状態が向上して、周産期や乳幼児の死亡率が低下すると、子どもを多く産む必要がなくなる一方、豊かさは女性の教育水準を引き上げ、社会進出を促して女性の晩婚化と出産抑制を引き起こす。しかも、学歴が生涯収入を左右するため、親の教育熱が高まり、家計の教育負担は増す。親は子どもの数を減らして負担を減らそうとする」と指摘し、「女性が子どもを産まなくなるのは、経済成長と生活の都市化に伴って生じる、言わば社会発展の帰結の一つだ」と結論づけている。ただ、これも先の岡本氏の論考と同じで、東北の生活が西日本より都市化しているとは考えられず、国全体としてそのような傾向はあるとしても、地域差が生じることの説明にはなっていないように思う。なお、衛藤氏は次稿で「出生率を上げるための方策を考えてみたい」としているが、どのような方策が提案されるか注目したい。

さて、宮城県知事選挙が一月三十一日に行われた。現職の村井嘉浩氏が五選を果した。その公約を見ると「社会全体で支える宮城

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
「北欧などの事例や近年の女性の高学歴化、そして結婚に期待する意識の変化を踏まえ、出生率の回復と女性就業を同時に達成する社会や地域を構築することが地域の持続可能性に大きく影響する」とし、それに加えて、女性のワークライフバランスと活躍だけでなく、「当然に、男性も育児や介護に参画しながら、生産活動に従事していくことが求められる」としている。

の子ども「子育て」というとても素晴らしい文言があるのだが、中身を見ると①(仮称)次世代育成・応援基金の設立、②不妊治療に対する支援の拡充、③県立高校の入学生全国募集モデルの検討・実施、④全日制・定時制・通信制を融合させた新しいタイプの高校の開設計、とあって、どう見ても「これじゃない」感が否めない。①はともかく、②は既に国で取り組んでいることであり、③④はただ子どももつながらでここに置いただけじゃないかという気までする。

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagna51/

Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
岡本裕明氏は自身のブログ「外から見る日本、見られる日本人」の中で「お一人様ライフの功罪」について書いた。自身が海外で体験した環境と日本のそれを比較して、少子化問題がなぜ改善できないのかという疑問に対して「お一人様ライフが楽しいからだ」と指摘している。「日本を含むアジアはナイトライフがあまりにも充実している」のだという。日本では飲んだくれないが、北米ではまず歩いて帰れず、交通機関にも限界があり、ナイトライフはせいぜい週末だけのことだったという。

か。都市圏であれば確かに深夜でも公共交通機関が動いており、帰るのに困らないかもしれないが、東北の地方都市ではそうはいかない。首都圏の合計特殊出生率が低い理由の一端にはなるかもしれないが、これは東北の低さの説明にはならなさそうなのが気になる。

責めを負う道理などないわけである。どんな事情にせよ、生まれてきた子どもがその出自に関わらず、肩身の狭い思いをしたりすることなく、しっかりと育つように必要な制度を整えることが巡り巡っては少子化の解消に貢献すると私も考える。

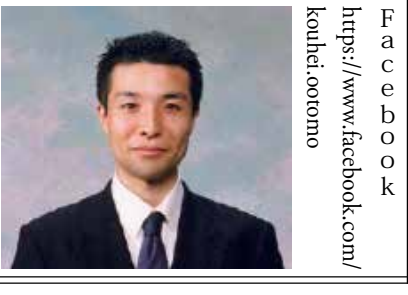
論プラットフォーム『アゴラ』に寄せた「少子化問題を考える①」出生率低下は経済成長にともなう不可避な人口動態の中で、「経済発展によって妊産婦や乳児の衛生環境、栄養状態が向上して、周産期や乳幼児の死亡率が低下すると、子どもを多く産む必要がなくなる一方、豊かさは女性の教育水準を引き上げ、社会進出を促して女性の晩婚化と出産抑制を引き起こす。しかも、学歴が生涯収入を左右するため、親の教育熱が高まり、家計の教育負担は増す。親は子どもの数を減らして負担を減らそうとする」と指摘し、「女性が子どもを産まなくなるのは、経済成長と生活の都市化に伴って生じる、言わば社会発展の帰結の一つだ」と結論づけている。ただ、これも先の岡本氏の論考と同じで、東北の生活が西日本より都市化しているとは考えられず、国全体としてそのような傾向はあるとしても、地域差が生じることの説明にはなっていないように思う。なお、衛藤氏は次稿で「出生率を上げるための方策を考えてみたい」としているが、どのような方策が提案されるか注目したい。

さて、宮城県知事選挙が一月三十一日に行われた。現職の村井嘉浩氏が五選を果した。その公約を見ると「社会全体で支える宮城

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
「北欧などの事例や近年の女性の高学歴化、そして結婚に期待する意識の変化を踏まえ、出生率の回復と女性就業を同時に達成する社会や地域を構築することが地域の持続可能性に大きく影響する」とし、それに加えて、女性のワークライフバランスと活躍だけでなく、「当然に、男性も育児や介護に参画しながら、生産活動に従事していくことが求められる」としている。

の子ども「子育て」というとても素晴らしい文言があるのだが、中身を見ると①(仮称)次世代育成・応援基金の設立、②不妊治療に対する支援の拡充、③県立高校の入学生全国募集モデルの検討・実施、④全日制・定時制・通信制を融合させた新しいタイプの高校の開設計、とあって、どう見ても「これじゃない」感が否めない。①はともかく、②は既に国で取り組んでいることであり、③④はただ子どももつながらでここに置いただけじゃないかという気までする。

大友浩平 (おともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
http://blog.livedoor.jp/anagna51/



Face book
https://www.facebook.com/kouhei.ootomo

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
岡本裕明氏は自身のブログ「外から見る日本、見られる日本人」の中で「お一人様ライフの功罪」について書いた。自身が海外で体験した環境と日本のそれを比較して、少子化問題がなぜ改善できないのかという疑問に対して「お一人様ライフが楽しいからだ」と指摘している。「日本を含むアジアはナイトライフがあまりにも充実している」のだという。日本では飲んだくれないが、北米ではまず歩いて帰れず、交通機関にも限界があり、ナイトライフはせいぜい週末だけのことだったという。

か。都市圏であれば確かに深夜でも公共交通機関が動いており、帰るのに困らないかもしれないが、東北の地方都市ではそうはいかない。首都圏の合計特殊出生率が低い理由の一端にはなるかもしれないが、これは東北の低さの説明にはならなさそうなのが気になる。

責めを負う道理などないわけである。どんな事情にせよ、生まれてきた子どもがその出自に関わらず、肩身の狭い思いをしたりすることなく、しっかりと育つように必要な制度を整えることが巡り巡っては少子化の解消に貢献すると私も考える。

論プラットフォーム『アゴラ』に寄せた「少子化問題を考える①」出生率低下は経済成長にともなう不可避な人口動態の中で、「経済発展によって妊産婦や乳児の衛生環境、栄養状態が向上して、周産期や乳幼児の死亡率が低下すると、子どもを多く産む必要がなくなる一方、豊かさは女性の教育水準を引き上げ、社会進出を促して女性の晩婚化と出産抑制を引き起こす。しかも、学歴が生涯収入を左右するため、親の教育熱が高まり、家計の教育負担は増す。親は子どもの数を減らして負担を減らそうとする」と指摘し、「女性が子どもを産まなくなるのは、経済成長と生活の都市化に伴って生じる、言わば社会発展の帰結の一つだ」と結論づけている。ただ、これも先の岡本氏の論考と同じで、東北の生活が西日本より都市化しているとは考えられず、国全体としてそのような傾向はあるとしても、地域差が生じることの説明にはなっていないように思う。なお、衛藤氏は次稿で「出生率を上げるための方策を考えてみたい」としているが、どのような方策が提案されるか注目したい。

さて、宮城県知事選挙が一月三十一日に行われた。現職の村井嘉浩氏が五選を果した。その公約を見ると「社会全体で支える宮城

「お一人様ライフ」や生活の都市化が少子化の原因なのか
「北欧などの事例や近年の女性の高学歴化、そして結婚に期待する意識の変化を踏まえ、出生率の回復と女性就業を同時に達成する社会や地域を構築することが地域の持続可能性に大きく影響する」とし、それに加えて、女性のワークライフバランスと活躍だけでなく、「当然に、男性も育児や介護に参画しながら、生産活動に従事していくことが求められる」としている。

の子ども「子育て」というとても素晴らしい文言があるのだが、中身を見ると①(仮称)次世代育成・応援基金の設立、②不妊治療に対する支援の拡充、③県立高校の入学生全国募集モデルの検討・実施、④全日制・定時制・通信制を融合させた新しいタイプの高校の開設計、とあって、どう見ても「これじゃない」感が否めない。①はともかく、②は既に国で取り組んでいることであり、③④はただ子どももつながらでここに置いただけじゃないかという気までする。

大豆肉は蝦夷の狩猟本能に火をつけるか消すかという事

人間は、何故他の生物の命を奪わねば生きられないのか？否、それは人間以前に全ての地球上の生命体に対する宿命的な問いかけであると言えるかも知れない。

自らの生命維持の為に他の生命を内に取り込む。地球上の生命始まって以来のその根本的構造は古代より全人類とまでは言わずとも決して少なくない人々にとって罪の意識の苗床でもあった。「人類と食」のテーマは人間の生活に悦びと楽しみを与え続けるはずのものだが、一方で特に人間に近い哺乳類や鳥類などを屠殺する行為に対しては常にその残酷性や非人道的な工程から多くの人が目を背けるか―その可能性について考察してみたい。



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かつて立ち読みを始めると東北好きである。

ながら食の快楽に興じているという現実が確かにあり、絶え間なく議論の的となってきた側面がある。

論理的に考えれば、植物もまた生命である以上、全ての生命を脅かすまじとするならばそれは自殺行為にしかならない事になるが、人類は何かと理屈をつけながら、食べて許されるものとそうでないものに線引きをしつつ世界各地に様々な「禁忌文化」を築き上げてきたと言えるだろう。

本稿では、肉食と菜食の対立と均衡に揺れる世界人類の食の問題に、日本なかにあらず東北が長く地道に保持してきた思想と実践の宝刀が煌きの一閃を斬り込めるか―その可能性について考察してみたい。

禁忌としての菜食思想の歴史は大変に古く、インダス文明や古代ギリシャにおいて既に生命への寛容が説かれ、動物を殺す事は殺人と同等の事であるとの考え方が存在していた。西洋の肉食忌避の哲学は一旦キリスト教台頭に伴って衰退するが、インドではアヒンサー(不殺生戒)の思想が何千年にも渡って浸透し、仏教思想にもその理念は引き継がれ広まって、遠く日本にまで長く深い影響を及ぼしたのである。西欧ではル

ネッサンス期に菜食思想が復興し、十九世紀にはベジタリアニズムの言葉が生まれ、後世を通じてベジタリアン協会や国際的な連合組織が設立されるに至っている。

周囲に菜食主義者がいないとしても、宮澤賢治の『注文の多い料理店』や『ピジテリアン大祭』のような直接的な殺生・肉食批判と菜食礼賛を示した作品から、藤子・F・不二雄の『ミノタウロスの皿』などの無批判で享乐的な肉食を強烈に皮肉るに留めたものまで、そのテーマに迫った創作物は少なくなく、その思想や問題意識には誰もが身近に触れる事ができると言える。

しかし、現実社会では日常的な大量の肉食傾向は世界的にますます増大傾向にあり、それに伴って食肉用家畜のおかれた環境もまた機械的・虐待的な過酷さを増しているとして、そうした現状を情報として拡散し、ベジタリアンやヴィーガン(完全菜食者)に対応した外食店や商品を普及させるなど、あらためて菜食を促し根強い地道な抵抗を続ける人々も存在する。

日本においては、仏教の中でも曹洞宗が修行の一環として発展させた独自の精進料理が後の懐石料理を始めとする健康志向の食文化としての日本料理のイメージを世界的に広める鍵となっており、この国が世界の菜食主義の潮流の最前線に立つ土壌は広く認識されて

いると見ても間違いではないかも知れない。

ところが、近年そうした菜食志向とは全く別のベクトルから、人間を古来より呪縛してきた「動物への罪悪感」に挑むかのような先進技術が脚光を浴びつつあるという。それが、人工肉・培養肉という分野である。

肉のようで、肉ではない―しかし、食べていて、言われなければ気づかない。そのような、驚くべき、代替肉」が、一般の店頭に出回り始めている。

それは、豚豚の「肉」の姿の事もあれば、鶏の唐揚げの姿の場合もある。山形県では以前から「麩」の唐揚げが食べられていたが、大豆は代替肉の材料として栄養素・食味共に適しており、その多くは豆腐や麩を活用したものである。

近年、世界的な鶏の唐揚げチェーンやハンバーガーチェーンが続々と主力商品を植物由来に切り替え、売り上げが元来の肉製商品を軒並み越えたと伝え聞く。代替肉は鶏や牛に止まる事なく、やはり近年漁獲量急減が聞かれるイカやウナギ、ウニやマグロに至るまで、こんなに芋などを巧みに活用した見た目も味もそっくりの製品が次々に生み出されているという。

また、飽くまで肉の「偽物」である代替肉と違い、これまた最先端の生命科学・工学を駆使し牛や豚の細

胞を培養し形成したのが「培養肉」である。こちらは大学を含め多くの研究機関が開発を進めるも未だ製品化には至っていないが、実現すれば「動物を殺さずして」本物の肉を食し続ける事ができ、ヴィーガンの課題である動物性由来の栄養素不足から来る健康障害の解決にもなり得るとして注目度の高い分野なのである。

しかしながらこのような大掛かりな開発・流通計画の展開は、実際のところ思想的・健康的立場からの菜食主義者らの為に進められている訳ではない。無論、特にこの分野に関心が高く、場合により劇的に生活上の影響を受け得るのは彼らであると考えられるが、人工肉・培養肉の開発には人類全体の未来、その存亡すらかかっているのである。

二〇五〇年には百億人を越えるであろうと言われる世界人口の中で、食肉の消費量は七〇%以上増えると予測されているのだが、その食肉用家畜を飼育する土地と飼料栽培の為に、膨大な森林伐採や温室効果ガス排出などの環境破壊に歯止めが掛からなくなる可能性があると言われているのである。

率直な感想として、人類はそこまでして肉を食いたいのか、と呆れるような思いもあるが、己もまたその愚かな人類の一匹に過ぎない。個人的な立場としては、少年期から肉食批判には関心があったが、その後特に

肉食に傾いたような過去はない。唯、今から二〇年程前に流行したBSE所謂狂牛病以来、安易に安い肉を求めた風潮に疑問を抱き牛丼チェーンなどにはすっかり行かなくなってしまうという事はある。だが、どうしても肉食という行為が避けられないと思う、我が「好物」の存在があった―それは、ラーメンである。

ラーメンには魚貝や鶏骨・豚骨が必須であり、具材としても又焼は欠かせない・と思つていたら、全て野菜材料の『ヴィーガンラーメン』が既に東京では少なくない店舗で供されているではないか。しかし私は魚介出汁が好きなのだ。又焼は麩や湯葉でできていてもいいが、出汁はせめて培養肉で・・などと悶絶している、結局「そうまでしてラーメンが食いたいのか」という内なる声が聞こえ、苦笑してしまう。

やはり人間はきつと、肉食を完全に止める事はできないに違いない、それも考えてしまうのである。

だが、そもそも殺す事のない肉食という、おそらく自然とは言い難い行為は、果たして持続可能な文化となり得るのだろうか？

人工肉・培養肉によって、本当に人類の業とも宿命とも言える罪悪感から解放される事が、私たちに与えられるのか、私たちがこの解答・解決になるのかどうか―それすらも、確信が

持てないのである。

宮澤賢治はその短編小説『なめとこ山の熊』にて、生きるために殺すマタギの殺生の描写に懺悔の表現を織り込む一方で、生命の尊厳を熊と人間が魂を(あの世へ)送り合う儀式という場面を表し、そこに日本、というより以前に東北の狩猟文化の真髄を最終的に示したように思われる。

肉食に関しては日本列島の中でも縄文時代以来最も深く関わり、落葉樹林帯ならではの狩猟文化を育んできたと言われる東北において、殺生に対する真摯な態度はいかに東北的という気もする一方、その性格が縄文時代から続くアニミズム由来のものなのか、それとも仏教伝来からのアヒンサー由来のもの、はたまた後世にヤマト政権側に侵略され続け、敗戦し続けた悲哀の歴史によって形成されたものか、更にはそれらが渾然一体となったものなのか―判別はつかない。

ただ、近年書かれた宮城県在住の熊谷達也著『相剋の森』に、人間は何故狩猟を行うのか(やめられないのか)という問いに対して、狩猟は本来、快楽を伴うものであり、だからこそ現代でも成立し得るのだという現代人としてのマタギ側の答が示されており、印象づけられていた。本来、人間は楽しみながら殺生してきた。それは、おそらく単純で安易な感情ではない。

熊や猪に振り返り討ちに遭うかも知れぬ恐怖、家族や恋人に逢えなくなるかも知れぬ不安、それらを乗り越えた達成感、そして獲物に対する感謝をその肉を獲得した喜びとともに感じたであろう。しかし、現代人のほとんどの環境からは、食の悦び以外の全ての感情を経る機会が失われてしまった。

狩猟・採集という、本来の極めて自然的ながら危険を伴う生活形態を捨て、殺物の大量栽培と同様に動物をも大量に管理し育て、そして屠殺する道を選択し、結果いまだ大きな行き詰まりを迎えようとしている人類。

この巨大な流れに伴ない長年抱えてきた罪悪感との矛盾を清算すべく、人類は少なくとも他の生命に苦痛を与えない形での(拙稿で度々言及している気もする)「進化」を成し遂げようとしているのであろうか。

世界に先駆ける形で、独り急速に人口を減少させていくだろうと目される日本という箱庭の島国の外で、遠からず百億人に膨らむという世界が、全人類的菜食主義へのシフトや人工肉・培養肉の普及で本

当に収拾がつくのか、それとも予想のつかぬ更なる混乱と地獄絵図が待っているのか・それは誰にもわからない。

だがやはり私は、一東北人として「真摯に」想像してみたいのである。全人類が、ここ東北に古の生き様を伝えるマタギら山の狩人たちのように、生命の尊厳と生態系の循環を常に意識しながらも、時折は狩猟を行い、家畜を屠殺し「本物の」肉を食して楽しむ―そのような未来が目指されるものではないか、と。

いや、あまりに理想主義的な妄想かも知れない。だが私はここで冒頭の問いに立ち戻りたくなるのだ。何故、地球上の生命は、人間は、他の生命を奪わなければならないのか、と。

それが生命というものであり、その問いを忘れずに生きる事ができる者こそ人間という存在である事―それを世界の人々がこの東北の風景の中に見出し続けられる未来を、私は信じてい



山形県の名店「龍上海」でも出していた・・・！『ベジタリアンラーメン』

シリーズ
遠野の自然
「遠野の大雪」
遠野 1000 景より



逆光のS L 銀河

昨年続き、今年一年もコロナ禍で明け、コロナ禍で締める状況です。
少し前には、ようやく終息するかと思いきや、オミクロンなる新型ウイルスが出現して、残念ながら終息宣言は年越しするようです。それにしても日本は諸外国と比べると異様に感染者数が少ないようで、この要因について「専門家」も明快な解答が出ないようです。
そうした人間の騒ぎをよそに、外の自然、四季は規則正しく循環し、順調に寒い冬に突入です。
今回は十二月号ですので、「遠野の風景」を冬の風物とSL銀河で締めたいと思います。来年もよろしくお申し込みあげます。



S L 銀河往路最終日



夕日を受けるウメモドキ



頭上の白鳥



アオサギ



柿の木に斜陽



ダイサギ



S L 銀河 柏木平 宮守間

海鼠(なまこ)は高級品で貴重品？ 酢のものが食べたい！

東北水産業は養殖にチャレンジしないのだろうか？

これだけ入手がむずかしくなったのに、なぜ養殖できないのだろうか？不思議だ

居酒屋で見かけなくなったナマコ酢のもの

「日本酒党」を自認している筆者であるが、日本酒の海鮮の常連のお供であった「ナマコ酢のもの」を居酒屋メニューで見かけなくなったことに最近になってようやく気づいた次第である。

宮城の田舎育ちの筆者であるが、三陸沿岸部が近いせいで、小さいときから、新鮮なナマコは普段から食べていた食材である。大人になってからは、もっぱら日本酒のお供として、常備するのがあたりまえであったと記憶している。

それがいま見かけないこと、何となく気づいたのである。見かけないということも驚きだが、自分がそのことにまったく気がつかなかったという事実にも驚いた。気がついた経緯は、知人が



日本酒党にとっての珍味：ナマコの酢のもの

最近SNSにアップした「ナマコの酢のもの」画像を見たときであった。しばらく食していないことに、このときにやっと気がついたのである。

価格を調べて仰天した

なぜ居酒屋メニューで見かけなくなったのか、パソコンで検索して調べてみた。そうしたら、何とナマコは

いつの間にか「高級品」になり、「貴重品」であり、「非常に高くなっていた」のであった。特に「乾燥ナマコ」の価格

には腰を抜かした。百グラムあたり、標準的な価格で二万円を超えているではないか。特級クラスではなんと五万円だという。さらに希少なものは目玉が飛び出るような価格もある。

乾燥ナマコをつくるのは手間暇がかかるので、ある程度高くなるのは分かるが、それ



ちょっとグロテスクな生のナマコ

にしてもとんでもない価格帯である。そのため「海の黒いダイヤ」とも言われているようだ。

乾燥ナマコはともかく、生のナマコはどうかと調べたが、まず検索でヒットする件数が非常に少ない。そして、価格は、一キログラムあたり、五千円以上である。

こうした背景があつて、かつては庶民の日本酒のお供だった、安く入手できるナマコにはなかなかお目にかかれず、高嶺の高級品を眺めるだけとなったのだ。

この十数年で価格は7〜8倍に

ナマコの価格推移も調べてみた。市場規模があまり大きくないせいか、検索してもなかなか適当なグラフがなく、ようやく見つけたのが、北海道のナマコの価格推移

を約六十年に亘ってトレースしたものである。このグラフを見るに、価格が暴騰し始めたのは二〇〇二年頃からのようだ。その後の十数年で約七倍から八倍に値上がりしている、尋常ならざる価格上昇としか言いようがない。

なぜこうなった？

このようなナマコ価格の上昇は、世界最大のナマコ消費国である中国の改革開放後の経済拡大によるナマコ需要の増加の影響が大きいようだ。

日本からのナマコの輸出货量に関する貿易統計を見ると輸出金額は、二〇一九年が二百四十九億円、二〇二〇年が二百四億円となっており、例えば二〇一九年の内訳ではイリ

コと思われる乾燥したものが百三億円、塩蔵品と思われる調製品(乾燥以外のもの)が百五億円、生もしくは冷凍品が四十一億円となっている。



何万円もする乾燥ナマコ

それが以前の統計がないので単純比較はできないが、平成十六年にはナマコ全体で五十五億円にすぎないもので、伸びは驚異的である。

かつて、中国では、ナマコは支配層の食品で、ナマコ料理は高級料理であり、それを賞味したのは限られた王侯や地主だけであったのが、中国の改革開放後の経済拡大で、購買層が広がったためとの分析がある。

昔の日本ではだれでも食べられたナマコが、かつて支配層だけが食べていた中国の需要が急拡大したために日本で食べられなくなったとは皮肉なことである。

密猟が横行？

これだけ価格が高騰しているためか、残念ながら「密猟」も横行しているようだ。

しかも「密猟プロ集団」もいるようで、なかなか捕まらないとのことである。こうした「密猟」が横行することによって、価格面にも影響を及ぼしているはずであるし、何よりも国内流通には確実に影響していることだろう。

食べられなくなると、なおさらに食べたくなるのが人情である。筆者もナマコの酢のものが食べたい。こうなったら、高くて良いから、購入してみようと思う。

東北水産業は養殖にチャレンジしないのか？

ここまで需給がひっ迫してくると、当然ながら「養殖」を検討するのは自然な流れである。

すでに北海道では「ナマコの種苗生産」としてスタートしているようだが、なかなかむずかしい側面がある

るようである。また、民間業者が「ナマコの陸上養殖」にもトライしているようだ。

「ナマコの種苗」を海に放流すると、逃げてしまつて効率が悪いが、「陸上養殖」ではそれもないということである。期待できるという。

それにしても、わが東北水産業では、同様の、いや北海道以上のチャレンジはないものだろうか。

次はアワビか？

ナマコが日本の食卓はおろか、居酒屋でも食せない状況であるが、次はアワビではないかとの推測もある。ひっ迫してから重い腰を上げるのではなく、先取するようにはできないものだろうか？ 小さな市場だからどうなつてもいいというのではなく、「日本の食の保護」と捉え直して、何とかして欲しいものである。

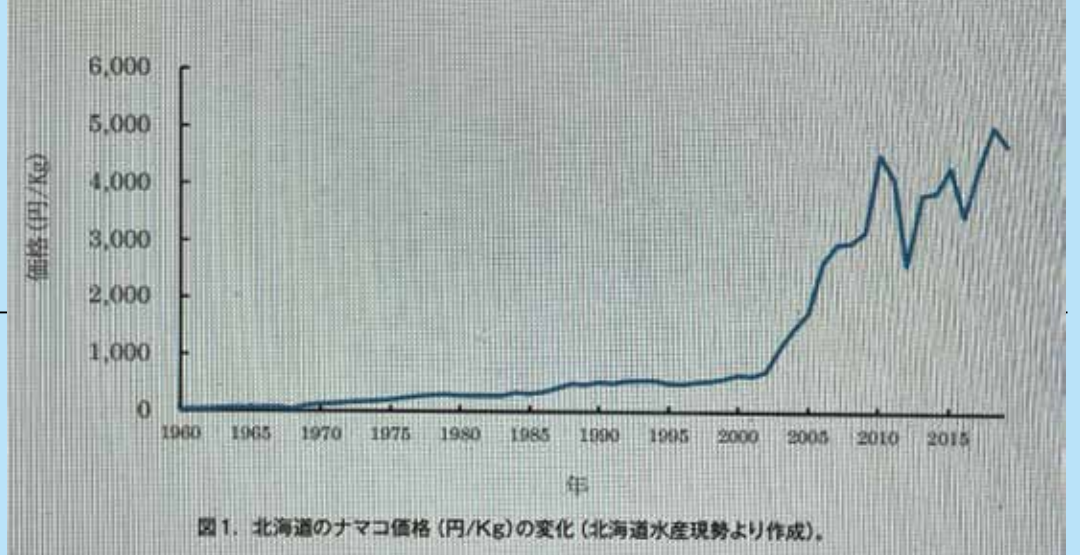


図1. 北海道のナマコ価格(円/Kg)の変化(北海道水産現勢より作成)

約60年間のナマコの価格変化



写真でお伝えする
東北の風景
【おおつちまるごと
復活まつり】
写真撮影 尾崎匠

